



タンザニアの離島ザンジバルにある州立ザンジバル大学に派遣されて約1年がたつ。2年間の体育教員養成課程で、体育の教員を目指す学生向けの座学と実技の指導補助に当たっている。宗教をはじめ、さまざまな面で文化の違いを強く感じているが、特に印象

JICA
だより



タンザニア
井手豊さん(42)
広島市出身

安全を問う「ダラダラ」

呼ばれる乗り合いバスだ。日本で不要になった中古の幼稚園バスなどを再利用しており、その数は非常に多い。そして、市内の交通事情は、日本ではめったにお目にかかれない光景の連続である。

逆走だけでもびつくりだが、速度や定員、積載の超過、斜めに固定されたハンドルに動かないメーター、壊れた座席、「ながら運転」…。そして軽い接触は「お互いさま」といった具合で事故にもならない。こういった状況で日々を過ごすうち、「安全、安心とは何か

？」という問いが頭を巡るようになった。

日常生活を送る中で、ダラダラの床に穴が開いていても「安全」ではないが「不安」ではない、という心境の変化が起きた。これまでの自分は特定の基準を満たしているから安全だと思いついて、その結果、安心だと無意識に判断していたことに気づかされた。



ドアを開けたまま走行するダラダラ。日本では考えられない安全安心の基準がここにはある

安全と安心は常にセットであり、安全の基準だけでなく、安心の基準すら他者に依存していたのではないかと、はっとした。生きていく上で不可欠なこの二つの要素を、最終的には自分で判断する重要性を改めて思い知らされたのである。

ここタンザニアは、日本と比べると安全と安心を確保するには時間も労力も必要だが、この経験は人間としての「生きる」という根源的な部分を刺激してくれた。改めて日本社会の安全安心に関する配慮の素晴らしさを再認識し、感謝するとともに、決して忘れてはならないとの思いを新たに。残り半年、「何となく」の日々ではなく、さらなる「気づき」に出会えることを期待して過ごしていきたい。